

■第124回 み言葉の分かち合い 《解説と默想》

●第1朗読 イザヤ書 58・7~10

バビロン捕囚からの帰還後、礼拝や断食などは再開されますが、不正や貧困があり、民は「断食しているのに神はなぜ顧みてくれないのか」(イザヤ 58・3)と嘆き、主は形式的な信仰になるなど告げます。(イザヤ 58・3-6)自らの生活から犠牲的な分かち合いとして「自分のパンを裂き与え」回復するまでの面倒をみるのに「家に招いて」(ルカ 14・13-14)も喜捨を忘れない。生存には「裸の人には衣を着せ」言葉だけにならず、(ヤコブ 2・15-16)見て見ぬふりをせず「同胞への助けを惜しまず」善きサマリア人に倣います。(ルカ 10章)人の歩みによって神の光は現され「あなたの光は曙のように射し出で」ます。(マタイ 5・16)捕囚で崩壊した共同体や人格の回復で「傷はいやされ」神に喜ばれる生き方(忘己喜主)によって「正義があなたを先導し」人の先と後(弱さ・過去)の「しんがり」を神に「守られる。」祈りは神に届き神は喜ばれ、主を「呼べば主は答え、ここにいる」と言い、不当な要求や抑圧で「轭を負わし」責任転嫁や非難で人に「指をさし」人を傷つけて共同体を壊す「呪いの言葉」は取り去り、相手を思って「心を配り」また、「苦しむ人」の求めを理解して「願いを満たすなら」神の「光は闇の中で輝き」闇は「真昼のようになる。」神の恵みは、神に喜ばれる生き方で得られると語られており「信仰は行いによって完成する」(ヤコブ 2・22)とあります。

●第2朗読 1コリントへの手紙 2・1~5

パウロの手紙の目的は、教会にある「人間的な価値観」を正し、信仰の土台を「神の力」に戻すことです。人ではどうにもならないところに働くのが「神の力」で、①人を生かし、救う力(弱者を支え、回復させ、心を新たにする)②立ち上がり、命を与える力(絶望から希望へ、縛りを解き放つ)③人を愛に導く実践力です。パウロがコリントに教会を建てるために(使徒18章)「そちらに行った」時が信仰の出発点です。イエスの十字架での死、復活による永遠の命、新しい神の国での生活が始まるとの良き知らせが「福音」これを聞いて心は開き、イエスに似た者へと造り変えられていくプロセス(2コリント5・17)が「救い」これが神の秘められた計画(エフェソ1・9)です。救いの恵みを歩むには、人の努力ではできず、(エフェソ2・8)聖霊の力(ガラテヤ5・16)で歩むことで、主に喜ばれる道へと導かれます。これを宣べ伝えるのに「人の言葉や知恵を」退けたのは、「十字架のイエスを中心」とし、これ以外は「何も知らないと心に決めた」からです。パウロの「弱さ」とは、①身体的・精神的な「衰弱」②町における迫害や反対者に対する「恐れに取りつかれ」③神の力にすがらざるを得ない「不安。」これらの弱さがあるときこそ「神の力」が働きます。(2コリント12・9)福音を伝える「わたしの言葉」は、人の理論や技法の「知恵にあふれた言葉に」頼らず、聖霊の働きによって「靈と力」が与えられ、話し上手な「人の知恵に」は頼らずにいると、神の力が働き、この「力をより信じる」ことで「信仰の土台」は揺らぐことはないでしょう。 【著者の一言】福音と救いが良く分かりました。

●福音書朗読 マタイ 5・13~16

イエスが山上で真福八端(内面)を語った後、塩と光(外面)の「生き方」について語られます。塩の役目は、腐敗防止(保存)、味を整え(良さを引き出す)、清めと契約(レビ記2・13、民数記18・19)があり、必要不可欠な存在が「地の塩」です。当時の塩には不純物が含まれており、塩分が抜けると本来の機能(本質)は失い、これと同様、信仰(神との関係)を断つと「何の役にも立たない」月は太陽の光を浴びて輝いて見え、人も神の光を浴びて輝くのが「世の光」です。「山の上にある町」の灯は夜でも見え、神の価値観で生きる者は自然体で「目立つ」ことなく「隠れることはできず」神から与えられ恵み(信仰、命、使命)の「ともし火」を、穀物を量る「升の中の下」に置くと灯は消え、恐れや他者との比較も神の光を消します。光(ランプ)は役目を果たす「燭台の上」に置き、人も与えられた場所で咲かせます。光は分け隔てすることなく届かせ「すべてを照らし」神との交わりを続けながら「輝かせなさい」真福八端に基づくあなたの「立派な行い」によって「父をあがめるように」なります。主はいつも「見ておられる方」(マタイ6・31)であり、イエスは「なりなさい」でなく、塩や光に「すでにされている」と断言されておられるので、イエスに近づいていくことでしょう。

【著者の一言】み言葉は尽きることのない泉のように思いました。

著者 蒲池 明憲